

ハッチョウトンボの聖地づくりの秘策

まず、ハッチョウトンボの写真をごらんください。キザな表現ですが、その神々しい姿には、神の恩寵を感じるほどです。真っ赤がオス、茶色っぽいのがメスです。写った指で胴の長さを推測できるでしょう。

胴の長さが1.5センチ、両羽を広げて3センチ。それが、私が採集して展示した個体の長さでした。一円玉の直径が2センチですから、いかに小さなトンボかが分かります。水の流れはほとんどなく、水草が茂り、水面上にも伸びている。周囲は小高い森に囲まれた、そんな湿地に、他の多くの種類のトンボとともに静かに生きている。これが、ハッチョウトンボが生息する環境の原則です。人里離れた辺鄙な場所に、局所的に生息するだけなのでなかなか発見されません。

私は小学5年生（昭和26年5月～）の時に当地で初めて発見し、夏休みの宿題に、採集箱に展示して学校に提出していたところ、受け持ちの先生（たまたま生物ご専門）が自宅に飛んで来られ、新聞にまで載りました。懐かしく思い出しますが、戦後のどさくさの中でも、文化的価値を認識していた当時の地方紙の新聞社にも頭がさがります。

他のトンボとしては、チョウトンボ、オオシオカラ、コシアキトンボ、ショウジョウトンボなどトンボ科、それにヤンマ科、イトトンボ科が共生しています。渓谷沿いの小径から、一步、奥まった所にパッと開けた、艶やかな春の湿地があって、無数のトンボが舞い、足元の水草に目を転じると、小さなハチかな、と思える、なんと、トンボの形をしたそれがいたのです。今も、その瞬間の感激を忘れることができなくて……。

ハッチョウトンボの生息地、発見！ といった話題が時たま記事になりますが、上述のような水圏環境を与えると、どこから飛んでくるかは分かりませんが、自然に発生するように思われます。

写真の場所は非公開です。なぜならば、マニアが押し掛けて乱獲されて絶滅する恐れがあるからです。そこで、その恐れさえなければ、尾瀬のように、人が歩く小路を作って、ただ静かに観察する、という公開の方法もあると思います。

耕作放棄地が社会的な問題となって再生の努力もなされていますが、決して100%復元することはないでしょう。一方、子どものよりよい生育環境の創造も課題です。そこで、選別的に、放置する耕地を決めてトンボの聖地を作り、子どもの情操教育に当てることとしたらいかがでしょうか。

どこに造るか、ですが、山間部にある放棄地をあえて湿地にして放置し、発生を待ちます。地主の理解が必要ですが、市民の有志がファンドを作って買い上げて管理するのがよいと思います。

